

平成三十一年度入学試験問題

国語

(教員養成課程)

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまでは、この問題冊子を開かないこと。
- 2 問題冊子は表紙を含めて五ページです。
- 3 解答用紙は五枚、下書き用紙は二枚あります。
- 4 解答は指定された解答欄に記入すること。
- 5 受験番号は解答用紙の指定欄に横書きで記入すること。
- 6 解答は縦書きとし、指定された字数にまとめること。句読点や括弧記号等も、一字分とする。
- 7 解答用紙のみを提出し、問題冊子・下書き用紙は試験終了後、持ち帰ること。なお、いかなる理由があっても、解答用紙以外(下書き用紙など)は受理しません。
- 8 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等により交換を必要とする場合は、手を挙げて監督者に知らせること。

問題 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

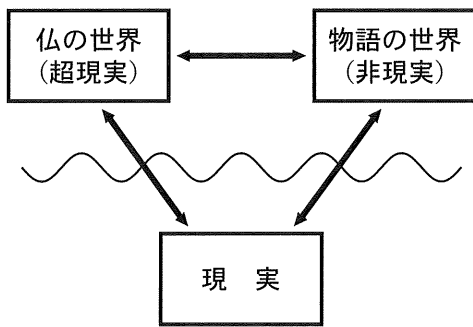
『更級日記』は僕の好きな作品の一つだ。ひたすら物語に憧れ、あらゆる物語を読ませてくださいと薬師仏に祈る少女が、上京しておばから『源氏物語』五十余巻を櫃に入れてもらったときの思いは、如何ばかりであっただろう。少女はひたすら読みふけり、大人になったら夕顔や浮舟のようになりたいと願う。やがて宮仕えをして、結婚し、子供が生まれ、夫が死ぬ。平凡すぎる人生の積み重ねに、彼女はようやく物語が現実と違うことに気付く。歴史の中に消えてしまつて不思議でない一人の女性の繊細な心の動きが、これほどリアルに等身大に今の時代に伝わってくることに感動する。

それにしても、『源氏』を何の注釈もなしに、少女がすらすら読んで共感できたというのは、何とも羨ましいことだ。それがもともと物語のいちばん素直な受容であつただろう。もつとも彼女も、物語に完全にはまりこんでしまうことには、いささかの後ろめたさを感じていたようだ。夢に出てきた坊さんに、「法華経五の巻をとく習へ」と訓戒されるほどであつた(「五の巻」は女人ジヨウブツを説く提婆達多品を含む)。今ならば、勉強そつちのけで少女マンガやゲームに耽るようなものだろう。マンガ罪悪論と同じように、物語罪悪論が生まれても不思議ではない。叱るのが親でも先生でもなく、坊さんが『法華経』を学べというところに、その時代の物語と仏教の緊張関係が暗示される。

それならば、物語と仏教はまったく相反するかと言うと、それも微妙なところがある。『更級日記』の作者は、物語世界を渴望するとともに人一倍信心深く、しかもたびたび夢で神仏のお告げを得ている。いちばん有名なのは、天喜三年(一〇五五)十月十三日の夢に阿弥陀仏を見て、「この度は歸りて、

後に迎へに来む」と告げられた場面であり、阿弥陀仏の姿はきわめて具体的に描かれている。考えてみれば、物語と宗教の世界は、いずれも現実を離脱するという方向で一致するから、『更級日記』の作者が、その両方に鋭い感性を持っていたのはそれほど不思議ではない。しかし、両者は同じように現実を離脱しつつも、相対立する。物語の世界が虚構の「非現実」であるとするれば、仏の世界は現実を超えた「超現実」とも言うべきものである。現実と仏の世界と物語の世界の三者の関係は、上の図のように示すことができよう。

『更級日記』の作者は、全体として現実を離脱する方向を志向しながら、年齢とともに非現実から超現実へとベクトルをずらしていくのである。一般に超現実が現実の世界より高い価値を付与されるのに対して、非現実の世界は基本的には現実よりも低く見られながらも、現実の人間の嗜好と深く結びついているために、否定しきれないという不安定な位置づけを持っている。『更級日記』の作者も、物語を捨てたはずなのに、宇治を通ると、浮舟のことを思わないわけにはいかない。



中世の仏教からする物語の位置づけは、このような図式から理解される。即ち、超現実の仏教の立場から現実を見据えながら、物語的非現実をどのように位置づけるかという問題である。そこで、一方で紫式部墮地獄説のような物語（＝非現実）否定論を展開させながら、他方で紫式部観音化身説のような形でその世界を肯定するとともに、超現実の仏教世界の中に吸収しようという両面作戦を取るようになる。もともとそれを超現実の仏教の勝利と見るべきか、仏法の力でも消滅させることのできない物語の強靱な力を認めるべきかは、必ずしも一義的に決定できない重層性を持ち続ける。

このような中世的な物語と仏教の葛藤は、十二世紀の後半には源氏供養^④としてはつきりとした形を示してくる。そのもとも古い資料は『源氏一品経』であるが、そこでは、『源氏』を「虚誕を以て宗と為す」とか「皆唯男女交会の道を語る」などという否定的な捉え方をして、制作者の亡霊も読者もともに「A」と、地獄行きだとする。その上で、『法華経』二十八品を書写し、それに『源氏』の各巻を加えることで、「煩惱を転じて菩提と為す」という救済が示される（本文は、日向一雅編『源氏物語と仏教』所収の袴田光康校訂本による）。ここには紫式部観音化身説は出ないが、やはり十二世紀後半成立の『今鏡』には紫式部の墮地獄説が取り上げられ、それに対して著者は観音化身説を提示している。

このような両義性を持った源氏供養の発展には、唱導と女性と和歌という契機の重層が大きな役割を果たす。和歌的伝統の中に『源氏』を取り込んでいくことは俊成に始まるが、「源氏一品経」は、その妻の藤原親忠女（美福門院加賀）の発願により、安居院の澄憲の作とされる（上掲、袴田の解題）。女性の発願によるのは、もともとの『源氏』の受容層を継承し、それに対して仏教側は、もともと文学に接近した唱導家に関わる。そのようにして超現実の仏教から非現実の物語が位置づけられ、それが俊成以後の和歌の伝統という現実の中に再構成されて伝えられていくのである。能の「源氏供養」もその流れの中で、新たな展開を示したものと考えられる。

ところで、ここで注目したいのは、女性という契機である。『源氏』が女性によって作られ、女性によって享受され続けたのであるから、『源氏』をめぐる議論は仏教対物語という抽象化された問題軸に収まり切れず、そこに男性対女性というジェンダーの問題がどこまでも付きまとうことになる。それ故、仏教が『源氏』をその支配下に置くことは、そのまま女性の世界が男性優位の世界の中に包摂されることを意味する。

そう考えると、時代を下って、本居宣長の「ものあはれ」論の持つ画期性も新たな目で見ることができるといえる。「ものあはれ」論は、単に仏教的（あるいは儒教的）な『源氏』解釈を否定したというに留まらない。そこには仏教（あるいは儒教）の持つ男性優位の擬似普遍的価値観への否定ということが内含まれていた。このことは、ややもすれば見逃されがちである。

宣長は、男女の恋愛にこそ「ものあはれ」のテンケイを見たが、それだけに留まらなかった。『紫文要領』の中で、「源氏の君をはじめとして、其の外⁴のよき人とても、みな其の心ばへ女童^{めわわ}のごとくにして、何事にも心弱く未練にして、男らしくきつとしたる事はなく、たゞ物はかなくしどけなく愚か

なる事多し。いかでそれをよしとはするや」と問い、「おほかた人の実の情といふ物は女童のごとく未練に愚かなる物也。男らしくきつとして賢きは、実の情にはあらず。それはうはべをつくろひ飾りたる物也」と答えている。

女童を「未練に愚かなる物」と決めつけるのは、いかにもロコツな女性差別のように見えるが、よく読んでみれば、実はその逆であることが分かるだろう。その「未練に愚かなる物」を人間の本质と見て、逆に、「男らしくきつとして賢き」ことを「うはべをつくろひ飾りたる物」として、否定するのである。これまで女性に結び付けられて軽蔑的に見られてきた弱さや愚かさこそ、本来の人間の姿である。男性的な強さは、所詮は虚勢を張った表面だけの偽物に過ぎない。強さよりも弱さ、男性よりも女性こそが、本当の人間のあり方だ。これが宣長の「ものあはれ」論の核心である。

「ものあはれ」論は確かにさまざまな点で不備があり、批判されるのももっともである。しかし、男性優位の価値観を完全に逆転させ、女性優位の人間観を高らかに宣言した点で、まさしくコペルニクス的テンカイとも言うべきであり、驚嘆すべき先駆性を持っている。宣長によれば、その「ものあはれ」をもっともテンケイ的に示しているのが『源氏』だといっているのである。それは、『源氏』を男の手から、再び女の手に奪還する第一歩であった。

(末木文美士『仏教からよむ古典文学』、KADOKAWA、二〇一八年刊による。一部改変。)

注 * 1 提婆達多品……『法華経』八巻・二十八品のうちのひとつ。

* 2 唱導……仏の教えを説き、人々を仏道に導き入れること。

* 3 安居院の澄憲……澄憲(一一二六～一一〇三)は、藤原通憲(信西)の子。天台宗の僧。学識と弁舌で知られ、大僧都・法印に至ったが、晩年は安居院(京都市上京区大宮通上立売北にあつた坊)に住み、唱導に努めた。安居院流の説教師(唱導師)の祖。

* 4 『紫文要領』……十八世紀後半に、本居宣長が著した『源氏物語』の注釈書。これを約三十年後に増補改訂したのが『源氏物語玉の小櫛』。

* 5 女童……平安時代は主に女房見習いの少女の意味で用いられたが、ここでは女の子、少女の意。

問一 二重傍線部 a、e のカタカナは漢字にし、漢字はその読み方を書きなさい。(二〇点)

問二 傍線部①に「もっとも彼女も、物語に完全にはまりこんでしまつことには、いささかの後ろめたさを感じていたようだ」とありますが、物語と仏教は当時の人々にどのように見られていましたか。三〇字以上四〇字以内で説明しなさい。(一〇点)

問三 傍線部②に「物語と仏教はまったく相反するか」とあり、それも微妙なところがある」とありますが、「微妙なところがある」とはどのようなことを指していますか。三〇字以上四〇字以内で説明しなさい。(一〇点)

問四 傍線部③の「この度は帰って、後に迎へに来む」の「む」について、次の例にならって、文法的に説明しなさい。(五點)

(例) 愚かなる物也 ナリ活用形容動詞「愚かなり」の連体形活用語尾
飾りたる物也 存続の助動詞「たり」の連体形

問五 空欄 A は、漢文の書き下し文が入ります。その原文は「定結輪廻之罪根、悉墮奈落之劍林」です。これを書き下しなさい。また、ここに用いられている表現技法を答えなさい。(二五點)

問六 傍線部④の「源氏供養」とは、本文によると、どのような目的で何をするのですか。五〇字以上六〇字以内で説明しなさい。(一五點)

問七 傍線部⑤の「虚誕を以て宗と為す」を、「虚誕」と「宗」をわかりやすい言葉に言い換えて、現代語に訳しなさい。(一〇點)

問八 傍線部⑥の「今鏡」について、次の語をすべて用いて、四〇字以上五〇字以内で説明しなさい。(二五點)

四鏡 歴史物語 紀伝体

問九 傍線部⑦の「おほかた人の実の情といふ物は女童のごとく未練に愚かなる物也」を、現代語に訳しなさい。(二〇點)

問十 傍線部⑧に「『源氏』を男の手から、再び女の手へ奪還する第一歩であった」とありますが、これは具体的にどのようなことを意味していますか。このことに関する本居宣長の貢献に言及しながら、一六〇字以上一七〇字以内で説明しなさい。(三〇點)

問十一 波線部に「マンガ罪惡論」とありますが、これに対するあなたの考えを、賛成、反対などの立場を示し、具体的な事例を挙げながら、一八〇字以上二〇〇字以内で述べなさい。(五〇點)